

-速報-

PDCシンポジウム「地域経済と公共空間Ⅱ～道路空間の再編と地域経済～」

6月18日、日本大学理工学部駿河台キャンパス1号館3階131教室にて開催されました

PDCのシンポジウム「地域経済と公共空間Ⅱ～道路空間の再編と地域経済～」が6月18日、午後2時より日本大学理工学部駿河台キャンパス1号館3階131教室にて開催されました。

近年、オープンカフェの社会実験などを経て、道路空間や河川空間のオープン化が推進されるようになりました。道路空間においても、車線を歩行空間に再配分する動きが進んでいます。これらの動きは公共空間の民間開放によって新たなビジネスチャンスを生み出すものであり、地域経済を支援する仕組みの提供とも言えます。

今回のシンポジウムは、講演とパネルディスカッションを通じ、こうした動きを全国に展開するためのアイデアを伺いながら、実現のための方策を考えるという目的で行われました。

シンポジウムでは、最初に横浜国立大学大学院都市イノベーション研究院准教授・野原卓氏による「ストリートデザインマネジメントについて考える」と題する講演が行われました。

引き続きパネルディスカッションが行われました。パネリストは、講演を行った野原氏と、法政大学デザイン工学部都市環境デザイン工学科教授・高見公雄氏、日本大学理工学部まちづくり工学科教授・天野光一氏（PDC理事長）、有限会社ユニー・プラネット代表取締役・栗原裕氏（PDC理事）、そしてコーディネーターは株式会社プランニングネットワーク代表取締役・伊藤登氏（PDC副理事長）が務めました。



■講演 「ストリートデザインマネジメントについて考える」

横浜国立大学大学院都市イノベーション研究院准教授・野原卓氏

野原氏は最初にストリートデザインマネジメントの4要素（交通・街路整備・使い方・沿道）を、どのように連動させていくかが重要なテーマであると述べました。その上で、「みちを『開く』」、「ストリートデザインマネジメント」、「新たな『戦略的都市づくり』」を考える」という3つのテーマに基づき講演しました。

まず「みちを『開く』」では、主に「道路空間の再配分」をテーマに、出雲市神門通りや松山ロープウェー通り、横浜市元町商店街、喜多方市ふれあい通り、大田区さかさ川通り、富山グランドプラザなどの事例を紹介。それぞれ歩道拡張によって通りが活用されている事例を紹介しました。



野原氏

2つ目のテーマである「ストリートデザインマネジメント」とは、街路（ストリート）を核としながら沿道とも一体となってハードとソフトを連動させて行う都市デザインマネジメントと定義。具体的な事例として喜多方市ふれあい通りにおける「沿道ファサード改修」、「蔵庭」事業、「歴史的建造物の再生」などの事例を紹介しました。

3つ目の「新たな『戦略的都市づくり』を考える」では、都市が元々有しているルーツ、時間軸の重要性を解説しました。また、街並みを形成していく上で、街路（みち）との関係性や、管理の手段など「関わり方の仕組み」をデザインしていく重要性を解説しました。

例えば、横浜市日本大大通りのオープンカフェでは、オープンカフェ前の店舗が自身で管理（店舗が開店時に開き、閉店時に閉じる）といった関わり方や、さらに街独自のストリートファニチャーづくりなどが紹介しました。

まとめとして、野原氏は今後のストリートは整備・管理運営主体、利活用主体、参加主体、応援主体といった層で多様な関わり方が必要になると述べました。その他、そのエリアに対する「関与度」と「頻度」の積分値で判断する「ストリートの評価指標」も提示するなど、ストリートデザインマネジメントによる地域経済への貢献手段についてのアイデアも披露しました。

■パネルディスカッション



伊藤副理事長



天野理事長



高見氏



栗原理事

パネルディスカッションでは、「道路と街路」の歴史やその違い、関係性や、「人口減少と自動車の免許取得人口の減少」がこれからの道路空間再編にどのような影響を与えるか、また「今後の空間の再編の方向性」、「海外と日本との違い」などの議論が行われました。

特に今後の道路空間の利用においては、従来の「ここまでが沿道、ここから車道」という区分けではなくて、「車道と歩道の間で楽しいグレーな部分」が必要になってきているという事例が各パネリストから出されました。例えば歩行者が歩いていて楽しい空間や、ベンチを置いて休憩スペースを作るなど、中間的なゾーンが現在各地で出てくるようになっており、今後もそうした方向に向かうのではないかと、という考え方が示されました。

そして、その際に問題となる現実的な法規や、道路行政、道路管理者、警察に対する対応策などについても議論がありました。道路構造令と街路構造令との関係性、規制をうまく回避しながら事実上の「道路空間のオープン化」を実験した事例など、道路空間の再編により、地域経済が活性化するヒントがたくさん出されました。

一方で、そもそも公共空間の活用が日本社会に文化として根付くのか、歩行者の多い都市部と車社会の地方では意識が異なるのでは、有名観光地と無名の場所では警察の意識も違うのでは、といった課題も挙げられました。